

「すべての霊的祝福」

エペソ人への手紙 1 : 3

July.18.2021

エペソ人への手紙 1 : 3 (パウロ)

Preface

前回のメッセージでは、エペソ書 1 : 3 から、賛美せずにはいられない使徒パウロの思いの根拠について探って行きました。

今朝は、同じエペソ書 1 : 3 から、「神はキリストにあつて、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださった」ということを考えていきたいと思います。

この 3 節の言葉に依りますと、神様は私たちに、確かにキリストにあつて、天上にあるすべての祝福、つまり、神様が与えることの出来る最上級のもの、これ以上ないものを、もうすでにお与えくださいました。

それなのに、私たちの祈りは、ほとんどが「ください」です。

「こうしてください、ああしてください、これください、あれください、これがないんです、あれもないんです」と、与えられていないものばかりが、心に浮かび、それを求めることばかりが、私たちの祈りとなっています。

もちろん、私たちは神の子ですから、神様に何だって求めることが出来ます。

聖書を見ますと、「あいつをとっちめてください！ あんな奴ら滅ぼしちゃってください」というような一見すると乱暴に思えるような祈りもたくさん出てきます。(まあ、こんな祈りには、神様中々答えてくださいませんし、大概の場合、祈った当人が神様の前にとっちめられ、砕かれ、遜るようにされていくことの方が遥かに多いと思いますが・・・)

まあいずれにしろ、私たちは、神様に、キリストの名によって、何だって祈れます。

しかし、どんなに祈って求めて与えられても、まだ神様が下さっていないものがあるかのような不足感とか、失敗感とか、無能だという思いが付きまとうならば、そこには何かしらの問題があるということです。

使徒パウロが、エペソ書全体に渡って、意図して伝えようとしていることは、「すべてのことは天上のことを基とし、天に繋がり、キリストにある霊的視野を持って見ない限り、ものごと理解も出来なければ、納得も出来なければ、意味を

見出すことも出来ない」ということです。

つまり、私たちの毎日毎日の生活は靈的であり、天上に属しているという、神様が私たちに求めておられる永遠の約束を見据える視点をもって生きない限り、無いものばかりが目について仕方がなく、いつも足りなくて、いつも失敗で、いつも渴いていて、潤いを感じることがないということです。

Part One

先ほども言いましたが、私たちが神様の御前に出て行き、最も多く口にする言葉は、「ください」です。

「祝福をくださり、恵みをくださり、力を下さり、進路を下さり、健康を下さり、回復を下さり、お金を下さり、癒しをください」

これらの言葉の裏を返しますと、神様はまだ出し惜しみしておられ、お与えくださっていないものが、まだまだたくさんあるということになります。

でも、聖書は、「天上にあるすべての靈的祝福をすでに与えた」と宣言しています。

そして、「いつも喜んでいなさい、すべてのことに感謝しなさい」と言います。

にもかかわらず、私たちは、日夜、足りないものばかりや、無いものばかりが目につき、思い浮かび、渴きが潤うこともなく、無いという思いが、傷となって、膿となって、不満や怒りや失敗感として表に出てきます。

聖書の言っていることと食い違ってますよね？

では、なぜ食い違うのか？

それは、「私たちが何者なのか？」を、はっきりと把握しきれていないからです。

「私たちキリスト者が何者なのか？」ということをも、短く明確に説明してくれる聖書箇所があります。

ペテロの手紙第一 2：11（パウロ）

「愛する者たち、あなたがたは旅人であり、寄留者です」と言います。

私たちキリスト者は、今の世、この世ではなく、来るべき世、神の国、新しい天と新しい地、天の御国に向かって生きる者たちです。

この世で、肉が求めるものを満たすことを目標に生きる者たちではないと言

います。

私たちは、人の手によらない、神の下さる永遠の住まいがあることを知っており、その天から与えられる住まいを着たいと、私たちのうめきのもとであるこの地上の幕屋を脱ぎ、天の住まいを着たいと切望している者たちのはずですが、本当に切望しているのでしょうか？

使徒パウロは、神から与えられている使命召命ゆえに、致し方なく地上の幕屋を着ながらの生活を主にあって邁進しているけれども、本当はいつでも脱いで天からの住まいを着たいと言うほどに、自分が、この世にあって寄留者であり、旅人であるということを実感していました。

12弟子のうち最も長寿だった使徒ヨハネも、「アーメン。主イエスよ。来てください。」と告白するほどに、この地上での肉の欲を満たすことが目標ではないということを実感していました。

今私たちが生きているこの世は、過ぎ去っていくもので、私たちの最終的な目的地ではありません。

キリストにある聖徒である私たちは、天上に属する者であり、そこに属するすべての祝福を頂いた者たちです。

ということは、足りないものなんか何一つありません。

すべてを与えられた者たちです。

Part Two

では、なぜ、私たちは不足を感じるのでしょうか？

それは、この世を最終的な目標と定めているからです。

私たちは、この世を最終的な目標と定め、この世に答えを見出そうとする時、不足を感じます。

私たちに許された“神の与えしすべての祝福”よりも、私たちが手にすることの出来る“今、この世で必要なもの”の方が、はるかに性急だと思えてしまうから、不足を感じます。

今、この世で手に入れなきゃいけないものに心縛られて、夜も眠れず、この世で手に入れたいものを求めて、神様の前に祈り、ひれ伏します。

父なる神様がキリストにあってお与えくださった天上のすべての霊的祝福の恵みや喜びを再確認し、再認識し、神様をほめたたえるために祈り、跪くのではなく、今、この世で手に入れたいもののために、神様の前にひれ伏します。

皮肉なことですね。

もちろん、神の前にひれ伏さないよりもよっぽどマシですし、神様は愛なるお方なので、必要ならばお与えくださいます。

また、その過ぎ去り滅びゆくもののために、恐れ、涙し、夜も眠れず、祈ることをもって、食欲を偶像とし、いつのまにか世のことを目標に生きている私たちの姿を悟らせるために、

さらには、神との関係が第一ではなく、物や人や物事との関係が第一で、それらのものを私の願うように変えるために、神様を利用しようという魂胆でいっぱいな私たちの有り様を私たち自ら気付かせるために、焦点のずれた祈りにも、神様は優しく応えてくださることがあります。

でも、それは願いが叶ったとか、叶わなかったという話ではありません。

私たちの願いが、神様のご計画され、お与えくださろうとしていることと食い違ってしまうという話です。

その食い違いが、分かっていますし、見えてもいません。

聖書が勧めていないことをもって、神様の前に走って出て来てひれ伏します。そうして、不平不満を口にします。

「神様は、私がくださいと言ったものを一度もお与えくださったことがない。神様は私の祈りを一度も聞いてくださったことがないから、感謝することも出来ないし、褒めたたえることも出来ない！」なんてことを思い、口にします。

何が本当の、まことの祝福で、何を目標にすればいいのかを見誤りますと、私たちの祈りは空虚で、私たちの信仰生活も空を打つようなものになりかねません。

Part Three

ヤコブの手紙 1 : 2-4 (パワポ)

私たちは、贖いだされたという恵みを経験したにもかかわらず、試練に会うとわめき、叫び、不平を言いまくったイスラエルの民たちのように、困難な試練に会うと不満たらたらどころか、

ヨナやヨブのように「こんなだったら、私を殺してください！ 私が何か悪いことしましたか！ なんでこんなことが私に起こるのですか！ 私がこの人よりも何かいけないところがありましたか？ なんであの人には与えて、あの人を持っている一つでも、私には下さないんですか！」と訴えます。

そして、「私は正しいんだ」と主張します。

高校生の頃の剣道部の夏の合宿で、今でも覚えている辛い練習が、クーラーのない真夏の体育館で、竹刀二本持って、股割りしながらする1000本素振りです。

足元は汗でびちゃびちゃで、気が遠くなりながら、上がらない振れなくなった腕をなんとか振り上げながら、ちょっとさぼろうとすると顧問の先生の愛の鞭が飛ぶ、千本素振りが本当に辛かったのですが、

私の高校の剣道部の顧問の先生は高校剣道会では有名な名将で、地区予選大会1回戦で負けてしまうような弱小剣道部をインターハイに毎年のように出場させ、3度全国制覇するような剣道部を作り上げた先生で、その先生の言う通りに練習さえすれば必ず強くなり、大学も100%剣道推薦で入れるような先生でした。

なのに、そんな先生に向かって、「何でこんな練習させるんだ！」と、夜中に先生の部屋に忍び込んで、竹刀で先生の頭を思いっきり叩くようなことを、私たちは神様によくします。

天地万物をお造りになった主なる神様が、この世を生きる私たちに、試練をお与えになるのは、その試練をもって、もっと重要なものを作り上げるためです。4節にある通り、何一つかけたところのない成熟した、完全な者とするためです。

不足だと思っていたものが不足ではなく、満足だと満足出来るところへと導くために、私たちに試練をくださいます。

そして、何一つかけたところのない成熟した、完全な者としてくださいます。

ただし、何一つかけたところのない成熟した、完全な者となるのは、今の世ではなく、来る世にあつてです。

このことを、第二コリントでは、このように表現します。

コリント人への手紙第二4：14－5：5（パウロ）

何一つかけたところのない成熟した、完全な者とは、主イエス様と共に、神の御前に立った時に成就します。

そして、主イエスと共によみがえるのは、この地上ではなく、来る世にあつてです。

来る世にあつて、よみがえらせていただくのです。

つまり、私たちの究極的な目標や達成や成就是、この地上ではありません。

すべての試練と苦難は、私たちのためであり、恵みと感謝が満ち溢れ、来る世でキリスト共によみがえらせていただいた時にもたらされる、比べものにならない重い永遠の栄光のためです。

パウロはこのことを、「私たちは知っている！」と言います。

確かに知っています。

では、知っている通りに、私たちは生きているのでしょうか？

キリストと共によみがえり、神様の御前に立つという究極的な目標が無いならば、また来る世に対する希望が無いならば、今、この世で経験する苦難が栄光になり、その苦難が重要で大切なものを作り上げるという悟りには至れません。

永遠の神の御国と、永遠の希望のためという視点や動機が無いならば、今、この世で私たちが苦難や試練を受けなければならない理由なんてありません。

私たちは、世の中で一定の試練や苦難に耐えた時に、人の定めた一定の栄光や報いを受けることは出来るでしょうが、もしそれが神の内に無いならば、すべて過ぎ去って消えてなくなってしまいます。

しかし、神の内にある者たちの試練や苦難は、重要なものを作り上げられていくために用いられます。

父なる神の訓練を受けて、磨かれ、削られ、精錬され、深められていかなければならないんですね。

だから、18節のような霊的視野、洞察力が求められるわけです。

コリント人への手紙第二4：18（パウロ）

私たちは、どうしても、今、目に見える世界にあって、報いを受けようと思い、そこで栄え、そこで憩うことを目標にして生きてしまいます。

第一コリント（9：24）に、「あなたがたも賞を得られるように走りなさい」というパウロの言葉がありますが、

熱心で立派な信仰生活を送れば神様が報いてくださり、今、試練が取り除かれ、今、苦難がないようにして下さることが賞だと、思ってしまうふしがあるかもしれません。

しかし、「あなたがたも賞を得られるように走りなさい」とは、今、ここで、この世の中で報い受けることではないですね。

イエス様は、この地上で人に認められ、人から褒められ、羨ましがられるような報いを受けることを目標として生きる人のことを偽善者だと仰いました。

「隠れたところで見ておられる父なる神様のことを思って生きないがために、彼らはすでに自分の報い・報酬を受けているのです」と言いますが、その彼らとは、この地上で報いられたいと願っている私たちのことでもあると思います。

もしかしたら、目に見える溢れるほどの物に囲まれた裕福な国に暮らす私たちは、もうこれ以上、この地上での生活を、もたらされる重い永遠の栄光を準備するために生きるのではなく、その栄光を作り出すための訓練と試練と忍耐と苦難を喜ばない者になってしまっているのかもしれない。

だからここで、今一度、聖書の御言葉を前にして、私たちの生き方を顧みる必要があります。

そして、このエペソ書1章の内容は、生き方を顧みるところへと導いて行きます。

Part Four

エペソ1章の3節から14節までは、神様の視点から見た神様のご計画、私たちに向けられた神様のみこころ、そして、みこころに従ってなされる神様の栄光の目的のあらましを述べていますが、その後、述べたことを読み手たちが理解できるようにと、こんな祈りを献げます。

エペソ人への手紙1：17－19（パウロ）

この祈りこそ、使徒パウロにとって最も性急な祈りです。

そしてもし、この祈りの内容が、私たちと共に無いならば、私たちはすぐに血肉に対する格闘に入ってしまいます。

あの人やこの人と自分を比べ、自分のやったことは認めてもらいたいけれども、人のやっていることは認めず、自分の成長はいくらでも見守りながら待ってもらいたいけれども、人の成長過程は見てられず、誰がより持ち持たないのかと、また誰がより神様から愛されているのかと、すぐに世の中のものさしをもって比較し、競争を押し始めます。

なぜならば、世の中がそう回っていて、その世の中で生きているからです。

いつのまにか、自分でも気づかないうちに、聖書の御言葉ではなく、世の言葉に染められているからです。

だからこそ、パウロの祈りの性急性がより明確になります。

パウロの祈りは、パウロの祈りに留まらず、私たちにとっても、もつとも性急な祈りであり、いつも必要な祈りです。

この目に見える今の世の世界は、私たちの本拠地でもなければ、ホームでもありません。 アウェイであり、敵陣です。

暗闇の権威を持つ支配者たちが主導している世界です。

大胆にも、神であられる主イエス様までも誘惑し、躓かせようと試みるような場所です。

包囲され、影響され、危険と脅しと誘惑の中で、自分ひとりさえも守ることが難しいということを、私たちはすぐに発見します。

キリストを信じる者たちが世の中に出て行きますと、孤立無援だということにすぐに気付きます。

右を見ても理解もされず、左を見ても助けても貰えず、前には獅子、後ろには虎、上には鷲、下には何でしょう？ モグラがいます。

私たち側に立ってくれる人がいません。

すると、私たちはそこで、キリストを信じる者としての光を隠し、キリスト者として生きることを諦めたくになります。

もしくは、諦めてしまいます。

で、こんなことを思います。

「神様は、なぜ、私を愛しておられると言うのに、このような敵対的勢力の中に私を置いておくのだろうか」、「こんな世の中で、キリストの福音に仕えながら生きることは当然のように無理だし、世の常識や世の流れに反することでもある」と、自ら信仰者として生きることを諦めてしまいます。

でも違いますね。

私たちは、永遠の目的地に向かって歩み、可能な限り、私たちが向かっている目的地と、私たちが持っているものを、もっと必要としている人たちに分け与えることを意図されている、期待されている人生です。

つまり、私たちが永遠の御国に入ることを全力で妨げようとタックルしてくる方たちを、私たちが天の御国に入る時、一緒に道連れにして入っていくのが私たちキリスト者です。

始めはタックルをされると倒れてしまいますが、起き上がり、また次タックルをされた時には倒れないだけでなく、しがみついて倒そうとする人までも引きずりながら、肩に抱えながら、一緒に、ついに天国に入っていくために呼ばれ、生かされているのが私たちキリスト者です。

パウロもそうでした。

エペソ人への手紙 3：6－9（パウロ）

福音をもって人々を道連れに天国に入っていく過程には、試練もあり困難も

ありますが、その中で、私たちは強められ、深められ、聖められていき、パウロのようにどんな境遇にあっても満足することを学び、私たちの国籍が天にあることを実感し、この上ない感謝へと変えられていきます。

私たちはこの福音に仕える者であることを忘れてはなりませんし、諦めることのないようにと、使徒パウロは私たち聖徒のために、さっきのような祈りを献げずにはいられなかったわけです。

Part Five

私たちが生きている今の世は、今の世がすべてであるがために、この世において譲ったり、譲歩したりすることは出来ません。

名誉も、健康も、お金も、土地も、プライドも譲歩することは出来ません。

ですが、私たちは、なんだって譲歩出来ます。

行き着くところ、この肉体の命までも譲歩出来ます。

「くれ！」というもののすべてあげられます。

なぜなら、その先に待っているのは、この肉体という幕屋を脱ぎ、この上ない偉大な栄光と富と、天から与えられる永遠の住まいがあるからです。

私たちが、世の誘惑に陥って、プライドや名誉や財産のために戦っているうちに、逃してはならないものを逃してしまいバタバタと生きてしまっていたある日突然、「何でこんな風に生きているんだろうか」と思い立って、一歩下がって信仰を持って見つめ直してみますと、譲れない、譲歩できないものなんか何一つないことに気付かされます。

なぜならば、私たちには、キリストにあって、唯一の神様を父と呼べるからです。

右の頬を打たれば左の頬を出し、敵のために祈り祝福し、敵が飢えているならば食べさせ、渴いているならば飲ませることが出来、悪に対して悪をもって返すのではなく、善をもって返し、「主よ、彼らをお許してください」と祈れるんです。

神様はアブラハムに、「あなたが祝福だ」と仰いましたが、私たちキリストにある聖徒たちこそ、祝福の源です。

私たちはすべてを持っています。

神様は、私たちを通して人々を祝福し、まことの命を溢れさせてくださいます。

ソドムとゴモラを滅ぼす前に神様は、十人の神を畏れ敬う者がいれば滅ぼさないと仰いましたが、そう仰るほどに、私たちキリスト者の存在こそが、この世

界がまだ保たれている理由です。

そんな馬鹿なと思いますか？

でもこれは、聖書が教えてくれる事実です。

イエス・キリストを信じて義とされた私たちが分かち合う福音をもって、すべての人が悔い改めへと進み、一人でも多くの人が減びから救われるために、今この世界が保たれています。

ヨブを苦しめた3人の友人たちに対して神様は、「わたしの愛する子ヨブを苦しめたためにあなた方を赦さない」と宣言しましたが、「もしヨブが、3人の罪の赦しのために祈るならば赦す」と仰り、実際にヨブが祈ったら3人は赦されました。

これ程に、私たちキリストにある聖徒でなければ、この世は赦されません。

私たちこそ、すべての人が救いに与るために耐え、祈り、赦し、受けとめ、与えることが出来ます。

世は忍耐もしなければ、こらえることもしません。

しかし、キリストにある聖徒たちは、耐え、祈り、赦し、受けとめ、与えることが出来ます。

なぜなら、私たちキリストにある聖徒たちこそ、世が持つことのない、すべての霊的祝福を得ているからです。

Conclusion

だから、キリストの十字架を避け、キリストの十字架を担うことを諦めるところから、脱却しましょう。

私たちは、本能的に愛は求めますが、十字架は避けようとします。

すると、能力ばかりを求め、物質ばかりを求め、名誉ばかりを求め、神様から取り付けた能力と物質と名誉を利用して、自分の欲を満たすことに信仰を消費していきます。

そして、すべての霊的祝福が与えられているという栄光を見逃し、肉と罪の観点に捕らわれ、与えることと施すことを忘れ、自分の貧しさばかりが目につくようになってしまいます。

貧しいから与え施せないのではなく、栄光を見逃しているから貧しく感じるのです。

私たちは、貧しい信仰生活ではなく、豊かで富んだ信仰生活を送ることが、その気にさえなれば、誰でも出来ます。

なので、そのために、キリストの十字架に根を下ろし、すべてを手に行っている

ことを実感できる私たちであれるように、祈っていきたいと思います。
共に、この事のために祈っていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ人への手紙 1：3b